



TITLE:

当教室に於ける過去7年間の尿路及び性器結核患者の動向

AUTHOR(S):

赤坂, 裕; 松井, 靖仁; 飯島, 博; 神長, 次郎; 広瀬, 潤次郎; 長沢, 太郎; 島, 誠一; 武村, 俊一; 有田, 三千男

CITATION:

赤坂, 裕 ...[et al]. 当教室に於ける過去7年間の尿路及び性器結核患者の動向. 泌尿器科紀要 1959, 5(2): 80-90

ISSUE DATE:

1959-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111721>

RIGHT:

当教室に於ける過去7年間の尿路及び 性器結核患者の動向

昭和医科大学泌尿器科教室（主任 赤坂 裕教授）

赤	坂		裕
松	井	靖	仁
飯	島		博
神	長	次	朗
広	瀬	潤	次郎
長	沢	太	郎
島		誠	一
武	村	俊	一
有	田	三	千男

A Statistical Analysis of the Patients with Genito-Urinary Tuberculosis during the Past Seven Years in G-U Clinic of the Showa Medical College

Hiroshi AKASAKA, M.D., Shinji MATSUI, M.D., Hiroshi IJIMA, M.D.,
Jiro KAMINAGA, M.D., Junjiro HIROSE, M.D., Taro NAGASAWA, M.D.,
Seiichi SHIMA, M.D., Toshikazu TAKEMURA, M.D. and Michio ARITA, M.D.

From the Department of Urology, Showa Medical College, Tokyo, Japan

(Director : Prof. Dr. H. Akasaka)

1) Total number of the out-patients with tuberculosis visited the clinic during the past seven years from 1951 through 1957 was 533, among which G-U tuberculosis was decreased by 5% from 15% in 1951 to 10% in 1957 and urinary tuberculosis alone was decreased by more than 10% from 73.4% in 1951 to 61.4% in 1957, while there was more than 10% increase in genital tuberculosis from 14.4% in 1951 to 27.1% in 1957.

2) Age distribution for the highest incident of both urinary and genital tuberculosis was found in the third decade, in which 142 patients (37%) were the former tuberculosis and 37 patients (36.2%) were the latter tuberculosis.

3) Number of male patients was 227 (53.4%) and that of female was 200 (46.6%). Left, right and both sides of urinary tuberculosis were 189 (44.1%), 210 (49%) and 30 (6.9%) cases respectively. Left, right and both sides of tuberculosis of the epididymis were 53 (40.2%), 52 (39.4%) and 27 (20.4%) cases respectively.

4) Bladder syndrom as the most frequent early symptom and chief complaint for urinary tuberculosis was found in 59% and 61.8% of total G-U tuberculosis patients respectively, among which pollakisuria was encountered in 30% and 30.2% followed by abnormal findings on urinalysis in 23.7% and 23.4%. That for genital tuberculosis was genital symptom in 95% and 97%, among which swelling of the testicle was found in 64.7% and 71.5%.

5) Tubercle bacilli were found on urinalysis in 152 patients with urinary tuberculosis,

while the bacilli were found in only 2 patients with genital tuberculosis.

6) The commonest findings on pyelogram were Latimer's Group III and IV.

7) Pulmonary tuberculosis was the commonest complication encountered.

8) Nephrectomy was employed to 42.5% of total surgical treatments for urinary tuberculosis in 1951, which decreased to 11.3% in 1957, while in genital tuberculosis it was increased from 10% in 1951 to 13.8% in 1957.

緒 言

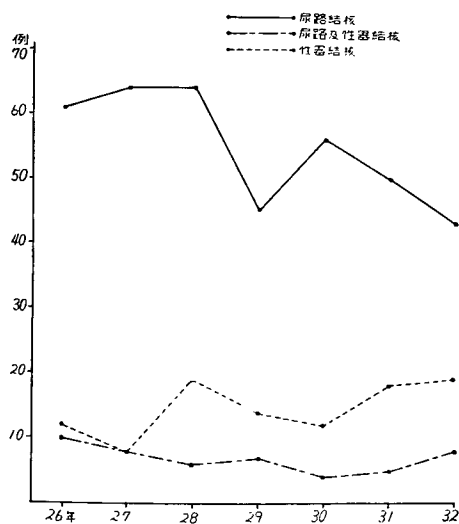
尿路結核に関してはその発生病理、臨床症状、診断、治療法、予後等全ての部面について内外共に無数の研究報告がある。又統計的観察も種々な角度から実施されている。

結核性疾患は近年、抗結核剤の発見進歩により、その様相を変化しつつ、患者数も減少の傾向にあるといわれているが、尿路結核は欧米に比してなお多く、本邦では未だに外科的泌尿器科疾患の約半数以上を占める状態であつて、最終的解決には程遠いことを感じさせられる。第23回日本泌尿器科学会東日本連会地方会（昭和33年10月19日）において、又々腎結核の問題が大きく採りあげられたのも故あることである。この際吾々も昭和26年より昭和33年までの過去7年間に於ける当教室にて経験した尿路及び性器結核患者について簡単な臨床的観察を行つたのでその結果をとりまとめて報告する。

I 尿路及び性器結核の発生頻度

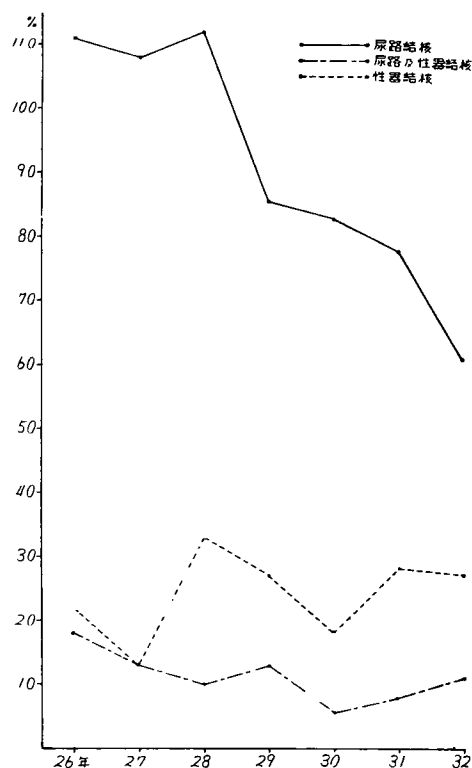
発生頻度は第2表に示す如くで、外来患者及び入院

第1図 年度別曲線（例数）



患者の増加とは逆に減少の傾向を示している。昭和26年には外来泌尿器科患者に対して外来尿路性器結核患者は15.0%であつたが、昭和32年には10.0%と5%の減少を示して、7年間の平均は10.4%である。又入院患者についても昭和26年には52.6%と入院患者の半数

第2図 年度別曲線（外来泌尿器科患者に対して）(%)

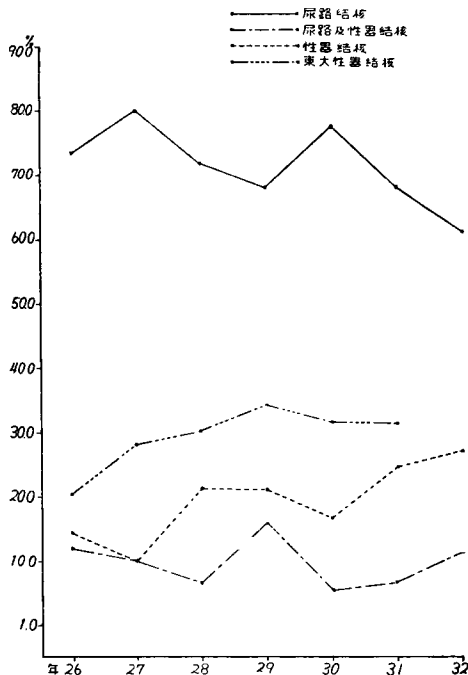


以上を示めていたが、昭和32年には25.8%と約1/4に減少している。更に尿路結核患者のみについてみると、昭和26年には外来結核患者の73.4%と2/3以上を占めているが、昭和32年には61.4%と10%以上の減少となつている。これは腎結核が減少の傾向にあるとの所説と一致する結果で、今後更に減少することであろうと考えられる。Beachamの統計では1930年より1950年6月までの20½年間に於て行われた腎切除術1,140中腎結核症は僅かに57例(5%)である。本邦に於ても東

第 1 表

[illegible]

第3図 年度別曲線(外来結核患者に対して)(%)



大の統計では昭和21年に13.5%であつたものが、昭和27年には5.9%と減少している。一方性器結核に関しては尿路結核の減少に対し、漸次増加の傾向があり、昭和26年の14.4%に対し、昭和32年には27.1%と10%以上の増加を示している。東大の統計でも昭和26年に20.6%であつたものが、昭和31年には31.4%と10%以

上の増加を見、吾々と同じ傾向にあることが判明した。このことは尿路結核が SM, PAS, INAH 等の抗結核剤により治癒或いは軽快することに比して、性器結核、特に副睾丸結核は化学療法では尿路結核程治療効果を期待出来ない点にその原因があるように考えられる。

Ⅱ 年令的關係

尿路結核及び性器結核共20才代が最高を示し、尿路結核では20才代142例(37.0%)30才代127例(33.1%)40才代53例(13.8%)10才代43例(11.2%)で、性器結核に於いても20才代37例(36.2%)30才代36例(35.2%)40才代20例(19.6%)10才代8例(7.8%)と云う数である。山田の統計に於ても20才代44.0%,30才代30.6%,10才代14.3%であつて、これは本邦の何れの統計に於ても概ね一致したところである。しかし米国の Kretschmer の統計では30才代36.6%,40才代27.9%と本邦よりも一年代上つている。

尿路性器合併の結核は30才代25例(52.0%),20才代14例(29.1%)となつており、何れにしても、20才代、30才代に多いことがわかる。

Ⅲ 性 別

腎結核(429例)の男女別では本邦及び外国の統計共殆どが男の方が多く、当教室に於ても男229例(53.4%)に対し、女200例(46.6%)と僅少差ではあるが、男の方が多くなっている。北川、鈴木によれば男1,595例(64%),女897例(36%),山田の統計も542

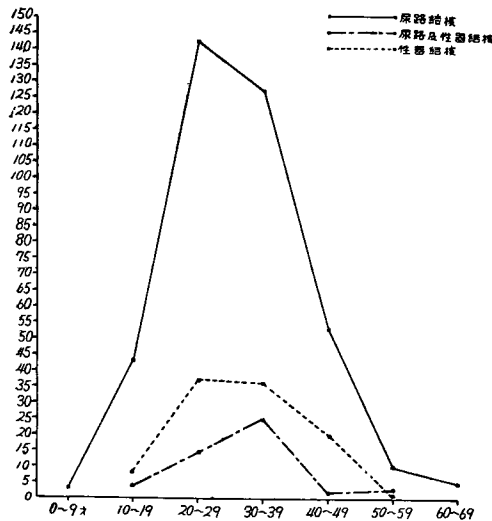
第2表 発 生 頻 度

	外科 来患 尿器 総数	内科 院患 尿器 総数	外来 来者 結核 総数	入院 院患 結核 総数	尿結 核患 者	性結 核患 者	性結 核患 者	外来結 核患者	入院結 核患者	入院結 核患者	尿結核 患者	尿路及 性器結 核患者	性器結 核患者	尿路結 核患者	尿路及 性器結 核患者	性器結 核患者	東大 性器結 核患者
	数	数	数	数	数	数	数	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者	患者
26	550	57	83	30	61	10	12	15.0%	52.6%	36.1%	11.1%	1.8%	2.2%	73.4%	12.0%	14.4%	20.6%
27	591	54	80	25	64	8	8	13.5%	46.2%	31.2%	10.8%	1.3%	1.3%	80.0%	10.0%	10.0%	28.1%
28	572	58	89	22	64	6	19	15.5%	37.9%	24.7%	11.2%	1.0%	3.3%	71.9%	6.7%	21.3%	30.1%
29	524	78	66	30	45	7	14	12.5%	34.7%	45.4%	8.6%	1.3%	2.7%	68.1%	16.0%	21.2%	34.2%
30	671	92	72	32	56	4	12	10.7%	38.4%	44.4%	8.3%	0.6%	1.8%	77.7%	5.5%	16.6%	31.6%
31	647	96	73	40	50	5	18	11.2%	41.6%	54.7%	7.8%	0.8%	2.8%	68.4%	6.8%	24.6%	31.4%
32	700	124	70	32	43	8	19	10.0%	25.8%	40.5%	6.1%	1.1%	2.7%	61.4%	11.4%	27.1%	
計	4255	559	533	211	383	48	102	10.4%	37.7%	30.9%	9.0%	1.1%	2.4%	71.8%	8.0%	19.1%	

第3表 年 令 の 関 係

	0 ～ 9 才			10 ～ 19 才			20 ～ 29 才			30 ～ 39 才			40 ～ 49 才			50 ～ 59 才			60～69才						
	尿 路	尿 路 及 性 器	性 器	尿 路	尿 路 及 性 器	性 器	尿 路	尿 路 及 性 器	性 器	尿 路	尿 路 及 性 器	性 器	尿 路	尿 路 及 性 器	性 器	尿 路	尿 路 及 性 器	性 器	尿 路	尿 路 及 性 器	性 器	尿 路	尿 路 及 性 器	性 器	
26	0	0	0	5	1	2	24	2	4	17	5	5	12	0	1	2	2	0	1	0	0	61	10	12	
27	1	0	0	8	1	2	22	2	1	20	5	4	10	0	1	3	0	0	0	0	0	64	8	8	
28	1	0	0	3	1	1	30	1	4	24	4	9	4	0	5	1	0	0	1	0	0	64	6	19	
29	1	0	0	4	0	2	23	1	7	9	6	3	7	0	2	1	0	0	0	0	0	45	7	14	
30	0	0	0	7	0	1	14	2	5	21	2	4	12	0	1	1	0	0	1	0	0	56	4	12	
31	0	0	0	13	0	0	15	2	8	18	1	3	2	2	7	0	0	1	2	0	0	50	5	18	
32	0	0	0	3	1	0	14	4	8	18	2	8	6	0	3	2	1	0	0	0	0	43	8	19	
計		3	0	0	43	4	8	142	14	37	127	25	36	53	2	20	10	3	1	5	0	0	383	48	102
	%	0.7	0	0	11.2	8.3	7.8	37.0	29.1	36.2	33.1	52.0	35.2	13.8	4.1	19.6	2.6	6.2	0.9	1.3	0	0	100	100	100
		3			55			193			188			75			14			5			533		
	%	0.5			10.3			36.2			35.2			14.0			2.6			0.9			100		

第4図 年令曲線



例中男子325例 (59.9%)、女217例 (40.1%) で男子が多い。外国でも Emmett & Kibler は1,131例中男742例、女407例、Kretschmer は221例中男は55.6%、女44.4%と同様男子に多い結果を報告している。

Ⅳ 患 側

尿路結核の左右差は左189例 (44.1%)、右210例 (49.0%)、両側30例 (6.9%)と右側にやや多い。Emmett & Kibler の調査に於ても右602例、左529例でやはり、右に多く、本邦文献を見ても大体右に多い様である。即ち山田は542例中、右285例 (52.6%) 左257例 (47.4%)、その他、北川、鈴木は54.1%、大桑は62.4%、志賀は57.8%と右側に罹患率の高いことを報告している。然し、臨床的にはそれ程意味のあるものではないと考える。

副睪丸結核に於ては、左53例 (40.2%)、右52例 (39.4%)、両側27例 (20.4%)で左右殆ど同数である。

Ⅴ 初発症状別による分類

尿路結核、特に腎結核の初発症状としては殆ど腎症状はない。殆ど大部分は結核菌尿が膀胱内に持続的に流入して膀胱粘膜に結核性潰瘍を発生し、結核性膀胱炎を併発して始めて認識されるものであることは衆知の通りである。本統計に於ても膀胱症状が59.0%と過半数を占め、次いで尿変化が23.7%となっており、全身症状9.6%、腎症状8.0%である。膀胱症状の内では頻尿が115例 (30%)で最高を示し、次いで排尿終末

時疼痛61例 (15.9%)となつている。

東大、慶大、北大の各統計でも膀胱症状が最も多いが、その内、東大では排尿痛及び終末痛が最高で69.7%、慶大も同様42.0%である。頻尿は東大、慶大共にこれに次いで夫々45.3%、31.8%である。北大では頻尿が最も多く34.8%、排尿痛は30.6%となつている。尿変化では血尿が52例 (13.5%)と圧倒的多数を占めている。腎症状は31例 (8%)であるが、その中では腎部鈍痛が22例 (5.4%)と最も多かつた。更に無尿の3例があるが、これは末期になつて来院したものである。全身症状では腰痛が13例 (3.3%)みられている。

性器結核では性器症状が95.0%で最も多く、その内、睪丸部の腫脹が66例 (64.7%)、睪丸部の疼痛は28例 (27.4%)である。これは副睪丸結核が殆ど疼痛なく腫脹して来ることによるものであろう。

Ⅵ 主訴別による分類

主訴別に分類しても膀胱症状が61.8%と半数以上を占め、次いで尿変化の23.4%、腎症状の7.5%、全身症状の6.5%と殆ど初発症状と一致している。膀胱症状の内では、頻尿が116例 (30.2%)と同様に多く、排尿終末時疼痛の68例 (17.7%)、排尿痛27例 (7%)の順である。尿変化に於て血尿が57例 (14.8%)、腎症状に関しても腎部疼痛の19例 (4.9%)と殆ど初発症状と同様の数字である。しかし尿変化の排尿終末出血が諸氏の統計と比較すると少いが、病歴の記載が不十分で、終末出血の相当数が血尿の中に含まれてしまつていると思われる。性器結核でもやはり初発症状と同様、睪丸部の腫脹を訴えて来たものが73例 (71.5%)、疼痛が23例 (22.5%)とその主訴は變つていない。

Ⅶ 尿 所 見

尿路結核では濁濁は274例 (85.6%)の殆どにみられ、清澄尿の46例 (14.4%)は術後の患者が大部分である。反応の酸性271例 (84.7%)は当然であるが、アルカリ性の49例 (15.3%)は以外に多かつた。これは大腸菌等の混合感染の場合にアルカリ性に傾むくものとする。志賀は5.0%、山田は2.2%にアルカリ性のものをみている。蛋白は陽性198例 (61.8%)で陰性122例 (38.1%)と約2/3の陽性率である。志賀は結核の場合の蛋白尿は腎外性蛋白尿であり、尿中の病変産物、膿球の融解、破壊に起因する蛋白反応で、膿球の少い清澄尿では稀であるといつている。白血球

第4表 初 発 症 状

症 状	腎 症 状					膀 胱 症 状						尿 変 化			全 身 症 状								性 器 症 状							
	腎臓部腫脹	腎臓部鈍痛	腎臓部疝痛	腎摘出術後瘻孔	無尿	排尿痛	排尿終末痛	排尿後不快感	排尿障碍	頻尿	残尿感	血尿	排尿終末出血	尿濁	発熱	全身違和	腰痛	下腹痛	腹部膨満感	浮腫	会陰部不快感	尿管瘻術	瘻孔よりの尿洩	睪丸部腫脹	睪丸部疼痛	陰よりの尿洩		血精液		
尿 路	2	22	1	3	3	27	61	19		115	4	52	14	25	5	6	13	4	1	3		2				1		383		
%	31					226						91			37								1							
	0.5	5.4	0.2	0.7	0.7	7.0	15.9	4.9		30.0	1.0	13.5	3.6	6.5	1.3	1.5	3.3	1.0	0.2	0.7		0.5				0.2				
尿性路器	8.0					59.0						23.7			9.6								0.2							
		1				3	3	1	2	16		6				2		1						9	4			48		
%	1					25						6			3								13							
		2.0				6.2	6.2	2.0	4.1	33.3		12.5				4.1		2.0						18.7	8.3					
性 器	2.0					43.7						12.5			6.2								27.0							
						1		1				1					1					1		66	28		3	102		
%						2						1			2								97							
						0.9		0.9				0.9					0.9					0.9		64.7	27.4		2.9			
	1.9											0.9			1.9								95.0							
東 大	32					314						膀胱不快感 24			120	23	123									450例 (1939年)				
慶 大	7.1%					69.7%						5.2%			26.6%	5.1%	27.3%													
	23					196						6			85	37	108	10 5 3								466例 (1930年)				
北 大	4.9%					42.0%						1.2%			18.2%	7.9%	23.1%	2.1%1.0%0.6%												
	33					166						17			62	10	48	17 28 14								8				
	6.0%					30.6%						3.1%			11.4%	1.8%	8.8%	3.1%3.1%2.5%								1.4%				
						1.1%																								
						34.8%						3.1%																		

第5表 主 訴

	腎 症 状			膀 胱 症 状								尿 変 化			全 身 症 状							性 器 症 状					
症 状	腎臓部疼痛	腎摘出術後瘻孔	無尿	排尿痛	排尿終末痛	排尿後不快感	頻尿	残尿感	尿閉	尿線滴下	膀胱部疼痛	血尿	排尿終末出血	尿濁	発熱	全身違和	腰痛	下腹部痛	腹部膨満感	浮腫	尿管瘻術	瘻孔よりの尿洩	睪丸部腫脹	睪丸部疼痛	陰よりの尿洩	血精液	
尿 路	19	3	7	27	68	20	116	6			1	57	18	15	2	8	6	3	1	3	2				1		383
	29			237								90			25							1					
%	4.9	0.7	1.8	7.0	17.7	5.2	30.2	1.5			0.2	14.8	4.6	3.9	0.5	2.0	1.5	0.7	0.2	0.7	0.5				0.2		
	7.5			61.8								23.4			6.5							0.2					
尿性路器	1			1	5	2	18		1	1		4	4	1				1			1	5	3			48	
	1			28								9			2							8					
%	2.0			2.0	10.4	4.1	37.5		2.0	2.0		8.3	8.3	2.0			2.0			2.0	10.4	6.2					
	2.0			58.3								18.7			4.1							16.6					
性 器	2.0						1									2						73	23		3	102	
				1											2							99					
%							0.9										1.9					71.5	22.5		2.9		
				0.9											1.9							97.0					
東	34			123	203	15	317	膀胱不快感 8			23	145	74	128	20	53											
				22.7	37.4	21	58.4	4.2			1.4	26.7	13.6	22.7	4.0	9.7											
大	6.2			62.2			5.6					40.3			13.7												
				127.2								63.0															

赤坂他一当教室に於ける過去7年間の尿路及び性器結核患者の動向

第6表 尿 所 見

	尿 路 結 核		尿路及び性器結核		性 器 結 核	
濁 濁 { (+) (-)	274 46	85.6% 14.4%	36 8	81.8% 18.2%	22 64	25.6% 74.4%
反 応 { 酸 アルカリ	271 49	84.7% 15.3%	29 15	66.0% 34.0%	36 50	41.9% 58.1%
蛋 白 { (+) (-)	198 122	61.8% 38.1%	25 19	56.8% 43.2%	14 72	16.3% 83.7%
白血球 { (卅) (+) (+) (-)	105 32.8% 101 31.6% 92 28.7% 22 6.9%	93.1%	20 45.4% 6 13.6% 14 31.8% 4 9.2%	90.8%	3 3.5% 5 5.8% 31 36.1% 47 54.6%	45.4%
赤血球 { (卅) (+) (+) (-)	37 1.2% 33 1.0% 164 51.3% 86 46.5%	53.5%	6 13.6% 4 9.2% 21 44.7% 133 2.5%	67.5%	0 2.4% 2 15.1% 13 82.5%	17.5%
上 皮 { (+) (-)	274 46	85.6% 14.4%	34 10	77.3% 22.7%	44 42	51.2% 48.8%
結核菌 { (+) (-)	152 168	47.5% 52.5%	18 26	40.9% 59.1%	2 84	2.4% 97.6%
大 腸 菌	7	0.2%	5	11.3%	0	
その他の細菌	2	0.06%	0		0	

第7表 Lattimer の分類

	0 群	I 群	II 群	III 群	IV 群	
26		1	6	2	3	12
27			2	13	15	30
28		1	2	12	10	25
29		4	5	14	10	33
30			3	19	15	37
31		1	3	11	19	34
32		2	6	6	17	31
		9	27	77	89	202
		4.4%	13.4%	38.1%	44.1%	

第8表 合 併 症

合併症	肺結核	脊リ 椎エ カス	肋リ 骨エ カス	膝節 関結	結髄 核膜 性炎	尿 毒症
尿 路	27	8	1	1	2	3
尿路・性器	5	2		1		

は 298例 (93.1%) の大多数にみられ、その内 (卅) は 105例 (32.8%) であったが、山田は94.4%といっている。赤血球も陽性は234例 (53.5%) と2/3にみられたが、(卅)は37例 (31.2%) で少く、(+) が 164例 (51.3%) であった。山田は(卅)5.3%、(+)16.2%、(-) 78.5%といっている。上皮細胞は陽性が 274例 (85.6%) で大半を占めているが、山田の統計では 35.5%の陽性率である。結核菌は陽性152例(47.5%)、陰性168例 (52.5%) と殆ど半数にみられた。

性器結核では尿は殆どが清澄で、濁濁尿は 22 例 (25.6%) である。反応もアルカリ性が50例(58.1%) で多く、蛋白は僅かに14例 (16.3%) に陽性をみたのみである。白血球は39例 (45.4%) の約半数に証明するが、赤血球は15例 (17.5%) に陽性で、殆どの71例 (82.5%)は陰性である。上皮細胞は44例 (51.2%)が陽性であるが、結核菌は僅かに2例 (2.4%) に証明出来たのみである。

Ⅶ 腎 盂 像

レ線写真の明確な202例について腎盂像をLattimerの方式によつて分類を試みたが、第IV群が89例 (44.1%) で最も多く、次いで、第Ⅲ群の77例 (38.1%)、

第Ⅱ群の27例(13.4%)，第Ⅰ群の9例(4.4%)となつて，0群は1例もなかつた。

このことは本邦に於ては未だに尿路結核の発見の時期が遅れ勝ちであると思つてよいのではなからうかと思われる。

Ⅸ 合併症

合併症は尿路，性器の結核性疾患をのぞき，他臓器

の結核性疾患についてのみ記したが，やはり肺結核の合併が一番多く27例あつた。尿毒症の3例は末期腎結核患者にみられたものである。

Ⅹ 治療別

治療別では特に手術的療法のみについて述べると，尿路及び性器結核患者に行つた手術の種類及び例数は第9表の通りである。

第9表 手術種類

手術方法	腎摘除術	腎部分摘除術	腎瘻術	尿管腰部皮膚移植術	腎固定術	尿管S状腸吻合	シエール氏手術	オール氏手術	偏側副睾丸切除	両側副睾丸切除	偏側除睾術	両側除睾術	精囊腺摘出術	前立腺全摘除術	精管切除術
例数	129	5	2	18	1	4	5	1	43	4	27	4	1	1	2

第10表 腎摘除術

	一般手術例数	腎摘除術例数 (腎部分摘除術を含む)	%	腎摘除術 入院結核患者数
26	40	17	42.5	56.6%
27	31	15	48.3	60.0%
28	39	16	41.0	72.7%
29	51	16	31.3	53.3%
30	67	21	31.3	65.6%
31	74	30	40.5	75.0%
32	123	14	11.3	43.7%
	425	129	30.3	61.1%

それを腎切除術についてみると昭和26年には一般手術に対して42.5%と半数弱を占めていた。そして昭和31年までは尚40%内外であつたものが，昭和32年には11.3%と大幅に減少している。更に入院結核患者数に対する腎切除例の割合も昭和26年は56.6%で，昭和31年までは53.3%～75%であつたものが，昭和32年には43.7%と半数を下廻る数となつてゐる。これは腎結核の治療が最近の傾向として早期手術を行わず，先ず化学療法を実施して，その経過によつて手術的療法を行う様になつたことの表われである。

性器結核では年々患者数の増加もあるが，手術数も一般手術数に対して昭和26年には4例(10%)であつたものが，昭和31年には16例(21.6%)，昭和32年17

例(13.8%)と増加し，入院結核患者数に対しても昭和26年の13.3%から昭和32年の53.1%と増加の傾向がみられる。

同様に東大の毎年の統計に於ても増加の傾向が見られているところで，尿路結核と性器結核とに対する化学療法の効果の点に於て相違あることを示し，性器結核，特に副睾丸結核では化学療法があまり効果のないことを証明していると考えられる。従つて性器結核に於ては手術的療法が第1の治療法であるといつてよいであろう。副睾丸切除術と除睾術との関係は特に有意の差は認められなかつた。

結 語

- 1) 昭和26年より，昭和32年までの7年間の外来結核患者数は533名であつた。
- 2) 尿路結核患者は漸次減少の傾向にあり，性器結核患者は増加の傾向がみられた。
- 3) 年令的關係は尿路，性器結核共20才代が最高で，次いで40才代，10才代の順である。
- 4) 性別では諸家の報告と同様男性の方が多かつた。
- 5) 患側は僅少差ながら右に多い。
- 6) 初発症状は膀胱症状が最も多く，尿変化，腎症状の順で，その内では頻尿，排尿終末痛，血尿が主症状であり，性器結核では睪丸部の腫脹が最も多かつた。
- 7) 主訴別でも殆ど初発症状と同様であつた。

第11表 性 器 手 術

	一 般 手術例	性器手術例	副睪丸 切除術	除睪術	性器手術例 一般手術例	副睪丸切除術 一般手術例	除睪術 一般手術例	性器手術例 入院結核患者
26	40	4	2	2	10.0%	5.0%	5.0%	13.3%
27	31	7	4	3	22.5%	12.9%	9.6%	28.0%
28	39	9	5	4	24.6%	12.8%	10.2%	40.9%
29	51	7	5	2	13.7%	9.8%	3.9%	23.3%
30	67	13	9	4	19.4%	13.4%	5.9%	40.6%
31	74	16	7	9	21.6%	9.4%	12.1%	40.0%
32	123	17	10	7	13.8%	8.1%	6.1%	53.1%
	425	74	42	31	17.1%	9.8%	7.2%	34.5%

- 8) 尿所見では尿路結核に於ては結核菌を約半数の152例に証明した。性器結核ではわずかに2例のみであつた。
- 9) 腎盂像は Lattimer の第Ⅳ群、第Ⅲ群が多かつた。
- 10) 合併症では肺結核が多くみられた。
- 11) 治療別では腎切除術は減少の傾向にあつて、副睪丸切除術は増加の傾向がみられた。これは尿路結核と性器結核とに対する化学療法の効果という点に於て格段の差がある為と思われる。

本論文の要旨は第23回日本泌尿器科学会東日本連合会地方会に於いて報告した。

尚、遠隔成績については現在調査中で、未だ報告する段階ではないので次の機会に報告する予定である。

文 献

- 1) Beacham, H.T. J. Urol., **67**, 441 1952.
- 2) Emmett, J.L. & Kibler, J.M. J.A.M.A. **101** 2351, 1938.
- 3) Greenberger, A. J. & Greenberger, M. E. : J. Urol., **67** : 222, 1952.
- 4) 市川篤二他：日本医事新報, 1435, 2941, 1436, 3044, 1951.
- 5) 市川篤二他：泌尿器科新書 Tbc-1 「腎結核の諸問題」南江堂, 1951.
- 6) 市川篤二他：日泌尿会誌, **43** : 449, 1952
- 7) 市川篤二他：日泌尿会誌, **44** : 505, 1953.
- 8) 市川篤二他：日泌尿会誌, **45** : 740, 1954.
- 9) 市川篤二他：日泌尿会誌, **46** : 817, 1955.
- 10) 市川篤二他：日泌尿会誌, **47** : 816, 1956.
- 11) 市川篤二他：日泌尿会誌, **48** : 981, 1957.
- 12) Kretschmer, H. L. : Urol. & Cut. Rev., **55** : 715, 1951.
- 13) 北川正惇他：日泌尿会誌, **19** : 219, 325, 1930.
- 14) 大越正秋：腎結核, 医学書院, 1954.
- 15) 大桑徳治・十全会誌, **42** : 2012, 1937.
- 16) 志賀亮：日泌尿会誌, **21** : 270, 1932.
- 17) 高橋明他：皮尿誌, **46** : 256, 1939.
- 18) 山田正己：日泌尿会誌, **31** : 321, 420, 1941.